

Book Review

口腔習癖 見逃してはいけない小児期のサイン

河井 聡 著



Reviewer

熊谷真一 Shinichi Kumagai
(静岡県・くまがい歯科クリニック)

A4 判変、オールカラー
140 頁
定価 (本体 5,000 円+税)
医歯薬出版刊



著者である河井 聡先生とは、比較的長い付き合いになる。そこでまずは著者の人となりを紹介したい。

彼は、私の数倍優秀な頭脳もっている臨床家である。考え方が論理的で鋭い。パソコンが得意で臨床統計にも興味もっている。客観的な視点を重視している。人間関係の付度よりも知的好奇心のほうが勝っているため、厳しい論点で問題点を浮き彫りにする。そのため、たまに敵をつくる。臨床に臨む姿勢は、記録とデータを駆使し、患者さんのために有効かつ効率的で妥協しない解決方法を、いつも模索している。

このような河井先生が 17 年間をかけて、さまざまな情報をインプットしながら患者さんと向き合い、臨床観察と記録を続けながら小児期の歯列と顎顔面の問題に向き合った本が、この「口腔習癖」である。

本書では、経過の思わしくない症例は口腔習癖の影響が大きい、という自

医院の統計データからの問題定義でスタートする。そして口腔習癖と因果関係が強い形態的特徴として、開咬、過蓋咬合、正中のずれの 3 つを問題点としてクローズアップする。この問題点を解決するためには、大人になってから苦労して介入するよりも、小児のうちの良いタイミングで口腔習癖と向き合うことで、比較的簡単に未来へのリスク軽減ができると説いている。

たしかに成人に対して、開咬や過蓋咬合のような形態を改善することや、悪習癖をコントロールすることは難しい。これらの難症例に日々悩んでいる臨床家の一人として、納得できるコンセプトである。

また本書が興味を引く最大の理由は、歯列を治すための装置の解説よりも、歯列や機能を悪化させる本質、見えない因子である習癖をターゲットにしていることにある。この見えない因子を、いかに見えるようにするか、きっと難題だったであろう。この問題

に対して、習癖の結果生じる兆候を見極め、処置の根拠を明確化し、回復した歯列の経過を丁寧に提示することによって形態と機能の正常化へのプロセスを提示し、見えない習癖の見える化を果たしている。

さらに、著者のパソコン脳から作成された、アイコンによる症例の把握もわかりやすい。形態と機能の問題点をアイコンによって分解、再配列することで、複雑な問題をシンプルにすることができている。これはきっとパソコンへのデータ入力用だったのかもしれないが、著者にも読者にも理解しやすいアイデアであり、複雑な症例の解決策につながっていることがわかる。

以上のように、今まで手にしたこの類の書籍のなかではきわめて臨床的であり、また小児期に正常な機能と形態を導くための道標となる一冊である。未来の難症例を予防するため、手に取っていただければ幸いである。